

Oracle® Virtual Directory

インストレーション・ガイド

10g (10.1.4.0.1)

部品番号 : B31395-02

2007 年 8 月

Oracle Virtual Directory インストール・ガイド, 10g (10.1.4.0.1)

部品番号 : B31395-02

原本名 : Oracle Virtual Directory Installation Guide, 10g (10.1.4.0.1)

原本部品番号 : B28834-02

Copyright © 2001, 2007, Oracle. All rights reserved.

© Oracle Virtual Directory Copyright 2000, 2005, 2006, 2007 Oracle, Inc.

© Oracle Virtual Directory Manager Copyright 2004, 2005, 2007 Oracle, Inc.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（*redundancy*）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるとしてプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, OctetString, OctetString ロゴ、VDE、DFE、DSE は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がありません。

All statements regarding Oracle's future direction or intent are subject to change or withdrawal without notice and represent goals and objectives only. THE INFORMATION CONTAINED IN THIS DOCUMENT IS PROVIDED "AS IS" WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, INCLUDING THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE.

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Included 3rd Party Software Credits. The Oracle Virtual Directory includes the following 3rd party software:

Code From The Apache Software Foundation: Licensed under the Apache License, Version 2.0 (the "License"); you may not use this file except in compliance with the License. You may obtain a copy of the License at <http://www.apache.org/licenses/LICENSE-2.0>. Unless required by applicable law or agreed to in writing, software distributed under the License is distributed on an "AS IS" BASIS, WITHOUT WARRANTIES OR CONDITIONS OF ANY KIND, either express or implied. See the License for the specific language governing permissions and limitations under the License.

RSA Data Security: "This product includes code licensed from RSA Data Security".

JCUP/Jflex: The copyright notice "Copyright 1996-1999 by Scott Hudson, Frank Flannery, C. Scott

Ananian” appears in all copies, and both this notice and the warranty disclaimer below appear in supporting documentation

Xerces 2.5: Copyright 1996-2003 by Elliot Joel Berk and C. Scott Ananian.

CSCodeViewer 1.0: Copyright 1999 by CoolServlets.com.

DES and 3DES: Copyright 2000 by Jeff Poskanzer . All rights reserved.

Crimson and Xalan J2: Copyright 1999-2000 The Apache Software Foundation. All rights reserved.

NSIS 1.0j: NSIS originally from Justin Frankel

JLDAP: Copyright 1999, the OpenLDAP Foundation, Redwood City, California, USA. All Rights Reserved.

Jython: Copyright 2000, Jython Developers

目次

はじめに	iii
動作が保証されているオペレーティング・システム、ディレクトリおよびデータベース	iv
インストール時のデフォルト名前空間の選択	iv
1 Windows における Oracle Virtual Directory のインストール	
オペレーティング・システム要件	1-2
ディスク領域要件	1-2
パッケージのインストール	1-2
ランタイムのメモリー割当ての変更	1-3
Oracle Virtual Directory の起動および停止	1-4
Oracle Virtual Directory の削除	1-4
2 Solaris における Oracle Virtual Directory のインストール	
オペレーティング・システム要件	2-2
ディスク領域要件	2-2
パッケージのインストール	2-2
GUI モード (X-Windows ベース)	2-2
コンソール・ベースのインストール	2-2
ランタイムのメモリー割当ての変更	2-3
ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化	2-4
Oracle Virtual Directory の起動および停止	2-4
Oracle Virtual Directory の削除	2-4
3 Linux における Oracle Virtual Directory のインストール	
オペレーティング・システム要件	3-2
ディスク領域要件	3-2
パッケージのインストール	3-2
GUI モード (X-Windows ベース)	3-2
コンソール・ベース	3-2
ランタイムのメモリー割当ての変更	3-3
ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化	3-4
Oracle Virtual Directory の起動および停止	3-4
Oracle Virtual Directory の削除	3-4

4 HP-UX 11 における Oracle Virtual Directory のインストール

オペレーティング・システム要件	4-2
ディスク領域要件	4-2
パッケージのインストール	4-2
GUI モード (X-Windows ベース)	4-2
コンソール・ベース	4-2
ランタイムのメモリー割当ての変更	4-3
ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化	4-4
Oracle Virtual Directory の起動および停止	4-4
Oracle Virtual Directory の削除	4-4

5 AIX における Oracle Virtual Directory のインストール

オペレーティング・システム要件	5-2
ディスク領域要件	5-2
パッケージのインストール	5-2
GUI モード (X-Windows ベース)	5-2
コンソール・ベース	5-2
ランタイムのメモリー割当ての変更	5-3
ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化	5-4
Oracle Virtual Directory の起動および停止	5-4
Oracle Virtual Directory の削除	5-4

6 GUI を使用した Oracle Virtual Directory のインストール

概要	6-2
基本インストール	6-2

7 コンソールを使用した Oracle Virtual Directory のインストール

インストールの開始	7-2
インストール・ディレクトリの選択	7-2
初期構成	7-3
管理ゲートウェイの構成	7-3
root ユーザー・アカウント	7-4
リスナー構成	7-4
ディレクトリ・ベースの接尾辞	7-5
インストール準備の完了	7-5
インストール後の手順 - SSL 構成	7-6
インストールの完了	7-7

8 Oracle Virtual Directory Manager クライアントのインストール

オペレーティング・システム要件	8-2
Oracle Virtual Directory Manager のインストール	8-2

はじめに

これは、オラクル社による OctetString 社の買収に伴う暫定リリースです。Oracle Virtual Directory (旧 OctetString Virtual Directory Engine: VDE)、Oracle Virtual Directory Manager (旧 Directory Manager Environment: DME) およびそのマニュアルの一部では、旧 OctetString 社の社名および製品名を参照している場合があります。これらの記述は今後のリリースで変更される予定です。

このマニュアルでは、Oracle Virtual Directory および Oracle Virtual Directory Manager のインストール手順と要件を説明します。Oracle Virtual Directory は、多機能の仮想ディレクトリ・サーバーです。Oracle Virtual Directory Manager プラットフォームには、マッピング・スクリプトの開発をサポートする開発ツールや高度な統合要件をサポートする Java プラグインだけでなく、Oracle Virtual Directory の管理機能もあります。

Oracle Virtual Directory と Oracle Virtual Directory Manager は、それぞれサーバーと管理クライアントのように一緒に運用することを前提としているため、インストール・プロセスはそれぞれ異なります。Oracle Virtual Directory を対象のサーバーにインストールした後、Oracle Virtual Directory Manager を任意の数のクライアント管理ワークステーションにインストールできます。

Oracle Virtual Directory アプリケーションは、Microsoft Windows 上では OVIDServer.exe という名前前で、UNIX および Linux プラットフォーム上では vde.sh という名前です。

動作が保証されているオペレーティング・システム、ディレクトリおよびデータベース

Oracle Virtual Directory 10g (10.1.4.0.1) は、次のコンポーネントで動作保証されています。ただし、最新情報は、Oracle Technology Network に記載の動作保証情報を参照してください。Oracle Technology Network には次の URL からアクセスできます。

<http://www.oracle.com/technology/index.html>

注意： カスタム・デプロイの一般的なガイドラインとして、Oracle Virtual Directory は Java ベースで、Java で接続可能なものと相互運用する必要があります。

オペレーティング・システム

- Solaris 8 および 9
- Red Hat Enterprise Linux 3.0 および 4.0
- SUSE Linux 9
- Windows NT 4.0 with SP6、Windows 2000 with SP3、Windows XP Professional および Windows 2003 Server
- HP-UX 11
- AIX 5.2

ディレクトリ

- Oracle Internet Directory
- Sun Java System (JS) Directory Server
- CA eTrust Directory
- IBM Tivoli Directory Server
- Novell eDirectory
- Siemens DirX
- Microsoft Active Directory (AD)
- Microsoft AD Application Mode

データベース

- Oracle 9.2.0.7、10.1.0.5、10.2.0.2 RAC およびスタンドアロン DB
- Microsoft SQL Server
- IBM DB2

インストール時のデフォルト名前空間の選択

Oracle Virtual Directory サーバーをインストールする際、デフォルト名前空間の入力を求められたら、できるだけ下位のドメイン・コンポーネントを選択します。たとえば、名前空間が `dc=orion,dc=com` の場合は、デフォルト名前空間に `dc=com` と入力します。名前空間が `dc=orion,dc=com,dc=uk` の場合は、`dc=uk` と入力します。デフォルト名前空間にできるだけ下位のドメインを入力すると、アクセス制御リスト (ACL) の構成に関する問題が発生しにくくなります。

Windows における Oracle Virtual Directory の インストール

この章では、Microsoft Windows NT および Microsoft Windows 2000 における Oracle Virtual Directory のインストールに必要な手順を説明します。インストール前提条件、システム・チューニングおよび Oracle Virtual Directory の削除方法を説明します。

オペレーティング・システム要件

Oracle Virtual Directory 10g (10.1.4.0.1) は、次の Windows プラットフォームで動作保証されています。

- Windows NT 4.0 SP6
- Windows 2000 SP3
- Windows XP Professional
- Windows 2003 Server

ディスク領域要件

ソフトウェアのインストール前に、使用可能なディスク領域が十分であることを確認してください。Oracle Virtual Directory のインストールには、ローカル・ストア・アダプタを使用するローカル・エントリのない状態で約 70MB のディスク領域が必要です。

ローカル・ストア・アダプタ (LSA) を使用しない場合、ディスク領域の使用はログ・ファイルおよび構成ファイルの保存のみに制限されます。ログ設定に応じて、使用量は最低限 (1 日当たり数 MB) の場合もあります。また、デバッグ・ロギング・モードを使用している場合は、かなり大量に使用されます。

LSA アダプタを使用する場合、LSA の運用に必要なディスク領域の量は、通常、アダプタにロードされるデータセット・サイズの約 150% です。たとえば、ユーザー当たりのエントリ数が 50 万で属性数が 10 の LDIF ファイルの場合、サイズは約 200MB になります。Oracle Virtual Directory では、インポートされたデータやその索引の保存に 300MB のディスク領域が必要です。

表 1-1 ディスク領域要件の例

エントリ数 / 属性数	ディスク領域要件
エントリ数が 5 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	30MB
エントリ数が 10 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	60MB
エントリ数が 25 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	150MB
エントリ数が 50 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	300MB

パッケージのインストール

Oracle Virtual Directory をインストールするには、次のようにします。

1. 管理者権限のあるアカウントで Windows にログインします。
2. 製品のバイナリ・ファイルをダウンロードしていない場合は、インストール・ディレクトリにダウンロードします。
3. 自己解凍型のアーカイブ (ovid1014.exe) をダブルクリックします。これにより、設定プログラムが自動的に開始されます。続行する前に、Oracle Virtual Directory をインストールするシステムのホスト名、およびインストールするホスト・システム上の場所を確認します。
4. 「GUI を使用した Oracle Virtual Directory のインストール」の章で説明されている、GUI ベースのインストール手順に従います。

ランタイムのメモリー割当ての変更

デフォルトでは、Oracle Virtual Directory は 512MB を使用するように設定されています。512MB という設定値は、Oracle Virtual Directory をディレクトリ・プロキシまたはデータベース・プロキシに使用したときにデータ管理に十分な余裕を確保できると実証された経験に基づいています。

Oracle Virtual Directory のオーバーヘッドを可能なかぎり低く抑える必要がある一部の ISV 環境のように、必要に応じて、より少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行することも可能です。ただし、少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行すると、たとえばキャッシュ・プラグインが、128MB のメモリーで構成されている場合ほど有効に機能しないなどの制約が発生します。

キャッシュ・プラグイン内に持続期間の長いオブジェクトを維持したり、大規模データ・セットを対象に負荷の大きいデータ操作を行ったりする必要がある場合、Oracle Virtual Directory の消費メモリーは 1GB 以上になることもあります。ただし大部分のデプロイメントでは、デフォルトの 512MB で十分です。

ローカル・ストア・アダプタでメモリーを大量に使用している場合は、Oracle Virtual Directory の運用に割り当てるメモリー量の調整が必要な場合があります。次の表をガイドラインとして使用してください。

表 1-2 メモリー割当て要件の例

ローカル・エントリ数 / ローカル属性数	追加が必要なメモリー割当て
エントリ数が 5 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	45MB
エントリ数が 10 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	90MB
エントリ数が 25 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	225MB
エントリ数が 50 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	450MB

Windows プラットフォームのメモリー値は、メインのインストール・ディレクトリにあるサーバー起動プロパティ・ファイル `OViDServer.lax` を編集することで変更できます。メモリー値を調整するには次の手順に従います。

1. メモ帳を起動して `VDEServer.lax` ファイルを開きます。
2. プロパティ `lax.nl.java.option.additional` を検索します。存在しない場合は、ファイルに追加します。値 `-Xmx512m` を MB 単位で必要な最大メモリー・サイズに変更または追加します（デフォルトで 512 に設定されています）。このパラメータが存在する場合、この部分の値はそのままにしてください。

デフォルト値は `-Xmx512m` です（この場合メモリー割当ては 512MB です）。値を Oracle Virtual Directory プロセスに割り当てるメモリー量に設定します。

3. `VDEServer.lax` ファイルを保存してファイル・エディタを終了します。

Oracle Virtual Directory の起動および停止

Oracle Virtual Directory NT サービスを Windows にインストールすると、コントロール・パネルの管理ツールから Oracle Virtual Directory を起動、停止および再起動できます。

Oracle Virtual Directory は、コマンドライン（コンソール・モード）でインストール・ディレクトリに移動して VDEServer.exe を実行することでも起動できます。Oracle Virtual Directory をこの方法で起動した場合は、[Ctrl]+[C] を使用するか、Oracle Virtual Directory が実行されているコマンドライン・ウィンドウを閉じることで停止できます。

Oracle Virtual Directory は、「スタート」→「プログラム」→「Oracle」→「OViD」フォルダから Start VDE（コンソール・モード）ショート・カットを実行して起動することもできます。Oracle Virtual Directory をこの方法で起動した場合は、Oracle Virtual Directory が実行されているウィンドウを閉じるか、ログ・アウトすることで停止できます。

Oracle Virtual Directory の削除

Oracle Virtual Directory を削除するには、次のようにします。

1. Oracle Virtual Directory が実行中でないことを確認します。実行中の場合は停止します。
 - 「スタート」→「プログラム」→「Oracle」→「OViD」→「Uninstall OViD」にあるアンインストーラのショート・カットを使用します。
または
 - 「コントロールパネル」アプレットの「プログラムの追加と削除」機能を使用して、Oracle Virtual Directory を削除します。

注意：データ・ファイル、ログ・ファイルまたはカスタマイズされた構成ファイルが存在する場合、Oracle Virtual Directory がインストールされていたフォルダは、「コントロールパネル」アプレットの「プログラムの追加と削除」では削除されません。Oracle Virtual Directory を完全に削除するには、これらのファイルを手動で削除する必要があります。

Solaris における Oracle Virtual Directory の インストール

この章では、Solaris 8 および 9 における Oracle Virtual Directory のインストールに必要な手順を説明します。インストール前提条件、システム・チューニングおよび Oracle Virtual Directory の削除方法を説明します。

オペレーティング・システム要件

Oracle Virtual Directory 10g (10.1.4.0.1) は、次の Sun Solaris プラットフォームで動作保証されています。

- Solaris 8 (SPARC)
- Solaris 9 (SPARC)

ディスク領域要件

ソフトウェアのインストール前に、使用可能なディスク領域が十分であることを確認してください。Oracle Virtual Directory のインストールには、ローカル・ストア・アダプタを使用するローカル・エントリのない状態で約 70MB のディスク領域が必要です。

ローカル・ストア・アダプタ (LSA) を使用しない場合、ディスク領域の使用はログ・ファイルおよび構成ファイルの保存のみに制限されます。ログ設定に応じて、使用量は最低限 (1 日当たり数 MB) の場合もあります。また、デバッグ・ロギング・モードを使用している場合は、かなり大量に使用されます。

LSA アダプタを使用する場合、LSA の運用に必要なディスク領域の量は、通常、アダプタにロードされるデータセット・サイズの約 150% です。たとえば、ユーザー当たりのエントリ数が 50 万で属性数が 10 の LDIF ファイルの場合、サイズは約 200MB になります。Oracle Virtual Directory では、インポートされたデータやその索引の保存に 300MB のディスク領域が必要です。

パッケージのインストール

Solaris (SPARC) ベースのシステムに Oracle Virtual Directory をインストールするには、次のようにします。

GUI モード (X-Windows ベース)

1. 管理者権限のあるアカウントで Solaris にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin` と入力します。
4. [「GUI を使用した Oracle Virtual Directory のインストール」](#) の章で説明されている、GUI ベースのインストール手順に従います。

コンソール・ベースのインストール

1. 管理者権限のあるアカウントで Solaris にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin -i console` と入力します。
4. [「コンソールを使用した Oracle Virtual Directory のインストール」](#) の章で説明されている、コンソール・ベースのインストール手順に従います。

ランタイムのメモリー割当ての変更

デフォルトでは、Oracle Virtual Directory は 512MB を使用するように設定されています。512MB という設定値は、Oracle Virtual Directory をディレクトリ・プロキシまたはデータベース・プロキシに使用したときにデータ管理に十分な余裕を確保できると実証された経験に基づいています。

Oracle Virtual Directory のオーバーヘッドを可能なかぎり低く抑える必要がある一部の ISV 環境のように、必要に応じて、より少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行することも可能です。ただし、少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行すると、たとえばキャッシュ・プラグインが、128MB のメモリーで構成されている場合ほど有効に機能しないなどの制約が発生します。

キャッシュ・プラグイン内に持続期間の長いオブジェクトを維持したり、大規模データ・セットを対象に負荷の大きいデータ操作を行ったりする必要がある場合、Oracle Virtual Directory の消費メモリーは 1GB 以上になることもあります。ただし大部分のデプロイメントでは、デフォルトの 512MB で十分です。

ローカル・ストア・アダプタでメモリーを大量に使用している場合は、Oracle Virtual Directory の運用に割り当てるメモリー量の調整が必要な場合があります。次の表をガイドラインとして使用してください。

表 2-1 メモリー割当て要件の例

ローカル・エントリ数 / 属性数	必要なメモリー割当て
エントリ数が 5 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	45MB
エントリ数が 10 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	90MB
エントリ数が 25 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	225MB
エントリ数が 50 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	450MB

Solaris プラットフォームのメモリー値は、メインのインストール・ディレクトリ（通常は /opt/OViD）にある vde_start.sh スクリプトを編集することで変更できます。メモリー値を調整するには次の手順に従います。

1. テキスト・エディタを使用して vde_start.sh を開き、ファイル末尾に移動します。最後の行は次のようになっています。

```
exec "$VDE_DIR"/jre/bin/java -server -Xmx512m
-Djava.net.preferIPv4Stack=true -Dvde.home="/opt/OViD"
-Dvde.lib="/opt/OViD/server/lib"
-Dvde.ldap.requireClientAuth="false" -Dvde.ldap.ciphers=""
com.octetstring.vde.VDEServer >
"$VDE_DIR"/log/vde_startup.log 2>&1
```

デフォルト値は -Xmx512m です（この場合メモリー割当ては 512MB です）。値を Oracle Virtual Directory プロセスに割り当てるメモリー量に変更します。

2. vde_start.sh を保存します。

ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化

Solaris マシンで Oracle Virtual Directory を自動的に起動させるスクリプトを作成するには、次の手順に従います。

1. root アクセス権でマシンにログオンします。
2. `cd /etc/rc3.d` と入力して `/etc/rc3.d` ディレクトリに移動します。
3. `ln -s /opt/OViD/vde.sh S22vde` と入力し、Oracle Virtual Directory をインストールしたディレクトリのルート（通常は `/opt/OViD`）にある `VDEServer.sh` ファイルへのシンボリック・リンクを作成します。
4. `chmod 754 S22vde` と入力し、スクリプトの実行を許可するよう権限を変更します。
5. `cd /etc/rc0.d` と入力して `/etc/rc0.d` ディレクトリに移動します。
6. `ln -s /opt/OViD/vde.sh K22vde` と入力し、Oracle Virtual Directory をインストールしたディレクトリのルート（通常は `/opt/OViD`）にある `vde.sh` ファイルへのシンボリック・リンクを作成します。
7. `chmod 754 K22vde` と入力し、スクリプトの実行を許可するよう権限を変更します。

Oracle Virtual Directory の起動および停止

Solaris プラットフォームでは、次のコマンドを使用して Oracle Virtual Directory の起動と停止を行います。

注意： Oracle Virtual Directory は通常、`/opt/OViD/` にインストールされています。

Oracle Virtual Directory を起動するには、次のように入力します。

- `/etc/rc3.d/S22vde start`
または
- `/opt/OViD/vde.sh start`

Oracle Virtual Directory を停止するには、次のように入力します。

- `/etc/rc0.d/K22vde stop`
または
- `/opt/OViD/vde.sh stop`

Oracle Virtual Directory の削除

Oracle Virtual Directory を削除するには、次のようにします。

1. Oracle Virtual Directory が実行中でないことを確認します。実行中の場合は停止します。
2. root 権限を使用して、Oracle Virtual Directory インストールの `Uninstaller` ディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `./Uninstall` と入力します。

注意： `./Uninstall` コマンドを実行しても、Oracle Virtual Directory がインストールされていたフォルダは削除されません。データ・ファイル、ログ・ファイルまたはカスタマイズされた構成ファイルが存在する場合、Oracle Virtual Directory を完全に削除するには、これらのファイルを手動で削除する必要があります。

Linux における Oracle Virtual Directory の インストール

この章では、Linux プラットフォームにおける Oracle Virtual Directory のインストールに必要な手順を説明します。インストール前提条件、システム・チューニングおよび Oracle Virtual Directory の削除方法を説明します。

オペレーティング・システム要件

Oracle Virtual Directory は、Linux カーネル・バージョン 2.2.12 および glibc バージョン 2.1.2-11 以降を実行する Intel Pentium プラットフォームでサポートされています。最低 64MB の RAM が必要です。ls /lib/libc-* コマンドを使用して glibc のバージョンを確認してください。

Oracle Virtual Directory 10g (10.1.4.0.1) は、Red Hat Enterprise Linux 3.0、4.0、および SUSE Linux 9 で動作保証されています。

ディスク領域要件

ソフトウェアのインストール前に、使用可能なディスク領域が十分にあることを確認してください。Oracle Virtual Directory のインストールには、ローカル・ストア・アダプタ (LSA) を使用するローカル・エントリのない状態で約 70MB のディスク領域が必要です。

LSA を使用しない場合、ディスク領域の使用はログ・ファイルおよび構成ファイルの保存のみに制限されます。ログ設定に応じて、使用量は最低限 (1 日あたり数 MB) の場合もあります。また、デバッグ・ロギング・モードを使用している場合は、かなり大量に使用されます。

LSA アダプタを使用する場合、LSA の運用に必要なディスク領域の量は、通常、アダプタにロードされるデータセット・サイズの約 150% です。たとえば、ユーザー当たりのエントリ数が 50 万で属性数が 10 の LDIF ファイルの場合、サイズは約 200MB になります。Oracle Virtual Directory では、インポートされたデータやその索引の保存に 300MB のディスク領域が必要です。

パッケージのインストール

Linux ベースのシステムに Oracle Virtual Directory をインストールするには、次のようにします。

GUI モード (X-Windows ベース)

1. 管理者権限のあるアカウントで Linux にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin` と入力します。
4. 「[GUI を使用した Oracle Virtual Directory のインストール](#)」の章で説明されている、GUI ベースのインストール手順に従います。

コンソール・ベース

1. 管理者権限のあるアカウントで Linux にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin -i console` と入力します。
4. 「[コンソールを使用した Oracle Virtual Directory のインストール](#)」の章で説明されている、コンソール・ベースのインストール手順に従います。

ランタイムのメモリー割当ての変更

デフォルトでは、Oracle Virtual Directory は 512MB を使用するように設定されています。512MB という設定値は、Oracle Virtual Directory をディレクトリ・プロキシまたはデータベース・プロキシに使用したときにデータ管理に十分な余裕を確保できると実証された経験に基づいています。

Oracle Virtual Directory のオーバーヘッドを可能なかぎり低く抑える必要がある一部の ISV 環境のように、必要に応じて、より少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行することも可能です。ただし、少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行すると、たとえばキャッシュ・プラグインが、128MB のメモリーで構成されている場合ほど有効に機能しないなどの制約が発生します。

キャッシュ・プラグイン内に持続期間の長いオブジェクトを維持したり、大規模データ・セットを対象に負荷の大きいデータ操作を行ったりする必要がある場合、Oracle Virtual Directory の消費メモリーは 1GB 以上になることもあります。ただし大部分のデプロイメントでは、デフォルトの 512MB で十分です。

ローカル・ストア・アダプタでメモリーを大量に使用している場合は、Oracle Virtual Directory の運用に割り当てるメモリー量の調整が必要な場合があります。次の表をガイドラインとして使用してください。

表 3-1 メモリー割当て要件の例

ローカル・エントリ数 / 属性数	必要なメモリー割当て
エントリ数が 5 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	45MB
エントリ数が 10 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	90MB
エントリ数が 25 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	225MB
エントリ数が 50 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	450MB

Linux プラットフォームのメモリー値は、メインのインストール・ディレクトリ（通常は /opt/OViD）にある vde_start.sh スクリプトを編集することで変更できます。メモリー値を調整するには次の手順に従います。

1. テキスト・エディタを使用して vde_start.sh を開き、ファイル末尾に移動します。最後の行は次のようになっています。

```
exec "$VDE_DIR"/jre/bin/java -server -Xmx512m
-Djava.net.preferIPv4Stack=true -Dvde.home="/opt/OViD"
-Dvde.lib="/opt/OViD/server/lib"
-Dvde.ldap.requireClientAuth="false" -Dvde.ldap.ciphers=""
com.octetstring.vde.VDEServer >
"$VDE_DIR"/log/vde_startup.log 2>&1
```

デフォルト値は -Xmx512m です（この場合メモリー割当ては 512MB です）。値を Oracle Virtual Directory プロセスに割り当てるメモリー量に変更します。

2. vde_start.sh を保存します。

ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化

次の手順では、Linux マシンで Oracle Virtual Directory を自動的に起動させるスクリプトを作成する方法を説明します。

1. root アクセス権でマシンにログオンします。
2. `cd /etc/rc3.d` と入力して `/etc/rc3.d` ディレクトリに移動します。
3. `ln -s /opt/OViD/vde.sh S22vde` と入力し、Oracle Virtual Directory をインストールしたディレクトリのルート（通常は `/opt/OViD`）にある `vde.sh` ファイルへのシンボリック・リンクを作成します。
4. `chmod 754 S22vde` と入力し、スクリプトの実行を許可するよう権限を変更します。
5. `ln -s /opt/OViD/vde.sh K22vde` と入力し、Oracle Virtual Directory をインストールしたディレクトリのルート（通常は `/opt/OViD`）にある `vde.sh` ファイルへの 2 つ目のシンボリック・リンクを `/etc/rc3.d` ディレクトリに作成します。
6. `chmod 754 K22vde` と入力し、スクリプトの実行を許可するよう権限を変更します。

Oracle Virtual Directory の起動および停止

Linux プラットフォームでは、次のコマンドを使用して Oracle Virtual Directory の起動と停止を行います。

注意： Oracle Virtual Directory は通常、`/opt/OViD/` にインストールされています。

1. Oracle Virtual Directory を起動するには、次に示すいずれかのコマンドを使用します。
 - `/etc/rc3.d/S22vde start`
または
 - `/opt/OViD/vde.sh start`
2. Oracle Virtual Directory を停止するには、次のように入力します。
 - `/etc/rc3.d/K22vde stop`
または
 - `/opt/OViD/vde.sh stop`

Oracle Virtual Directory の削除

Oracle Virtual Directory を削除するには、次のようにします。

1. Oracle Virtual Directory が実行中でないことを確認します。実行中の場合は停止します。
2. root 権限を使用して、Oracle Virtual Directory インストーラの Uninstaller ディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `./Uninstall` と入力します。

注意： `./Uninstall` コマンドを実行しても、Oracle Virtual Directory がインストールされていたフォルダは削除されません。データ・ファイル、ログ・ファイルまたはカスタマイズされた構成ファイルが存在する場合、Oracle Virtual Directory を完全に削除するには、これらのファイルを手動で削除する必要があります。

HP-UX 11 における Oracle Virtual Directory のインストール

この章では、HP-UX プラットフォームにおける Oracle Virtual Directory のインストールに必要な手順を説明します。インストール前提条件、システム・チューニングおよび Oracle Virtual Directory の削除方法を説明します。

オペレーティング・システム要件

Oracle Virtual Directory 10g (10.1.4.0.1) は、HP-UX 11 オペレーティング・システムで動作保証されています。次に示す HP ドキュメントで説明されているパッチは、HP-UX 11 に Oracle Virtual Directory をインストールする前にインストールしておく必要があります。

<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html>

ディスク領域要件

ソフトウェアのインストール前に、使用可能なディスク領域が十分であることを確認してください。Oracle Virtual Directory のインストールには、ローカル・ストア・アダプタを使用するローカル・エントリのない状態で約 70MB のディスク領域が必要です。

ローカル・ストア・アダプタ (LSA) を使用しない場合、ディスク領域の使用はログ・ファイルおよび構成ファイルの保存のみに制限されます。ログ設定に応じて、使用量は最低限 (1 日当たり数 MB) の場合もあります。また、デバッグ・ロギング・モードを使用している場合は、かなり大量に使用されます。

LSA アダプタを使用する場合、LSA の運用に必要なディスク領域の量は、通常、アダプタにロードされるデータセット・サイズの約 150% です。たとえば、ユーザー当たりのエントリ数が 50 万で属性数が 10 の LDIF ファイルの場合、サイズは約 200MB になります。Oracle Virtual Directory では、インポートされたデータやその索引の保存に 300MB のディスク領域が必要です。

パッケージのインストール

HP-UX ベースのシステムに Oracle Virtual Directory をインストールするには、次のようにします。

GUI モード (X-Windows ベース)

1. 管理者権限のあるアカウントで HP-UX にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin` と入力します。
4. 「GUI を使用した Oracle Virtual Directory のインストール」の章で説明されている、GUI ベースのインストール手順に従います。

コンソール・ベース

1. 管理者権限のあるアカウントで HP-UX にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin -i console` と入力します。
4. 「コンソールを使用した Oracle Virtual Directory のインストール」の章で説明されている、コンソール・ベースのインストール手順に従います。

ランタイムのメモリー割当ての変更

デフォルトでは、Oracle Virtual Directory は 512MB を使用するように設定されています。512MB という設定値は、Oracle Virtual Directory をディレクトリ・プロキシまたはデータベース・プロキシに使用したときにデータ管理に十分な余裕を確保できると実証された経験に基づいています。

Oracle Virtual Directory のオーバーヘッドを可能なかぎり低く抑える必要がある一部の ISV 環境のように、必要に応じて、より少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行することも可能です。ただし、少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行すると、たとえばキャッシュ・プラグインが、128MB のメモリーで構成されている場合ほど有効に機能しないなどの制約が発生します。

キャッシュ・プラグイン内に持続期間の長いオブジェクトを維持したり、大規模データ・セットを対象に負荷の大きいデータ操作を行ったりする必要がある場合、Oracle Virtual Directory の消費メモリーは 1GB 以上になることもあります。ただし大部分のデプロイメントでは、デフォルトの 512MB で十分です。

ローカル・ストア・アダプタでメモリーを大量に使用している場合は、Oracle Virtual Directory の運用に割り当てるメモリー量の調整が必要な場合があります。次の表をガイドラインとして使用してください。

表 4-1 メモリー割当て要件の例

ローカル・エントリ数 / 属性数	必要なメモリー割当て
エントリ数が 5 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	45MB
エントリ数が 10 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	90MB
エントリ数が 25 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	225MB
エントリ数が 50 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	450MB

HP-UX プラットフォームのメモリー値は、メインのインストール・ディレクトリ（通常は /opt/OViD）にある vde_start.sh スクリプトを編集することで変更できます。メモリー値を調整するには次の手順に従います。

1. テキスト・エディタを使用して vde_start.sh を開き、ファイル末尾に移動します。最後の行は次のようになっています。

```
exec "$VDE_DIR"/jre/bin/java -server -Xmx512m
-Djava.net.preferIPv4Stack=true -Dvde.home="/opt/OViD"
-Dvde.lib="/opt/OViD/server/lib"
-Dvde.ldap.requireClientAuth="false" -Dvde.ldap.ciphers=""
com.octetstring.vde.VDEServer >
"$VDE_DIR"/log/vde_startup.log 2>&1
```

デフォルト値は -Xmx512m です（この場合メモリー割当ては 512MB です）。値を Oracle Virtual Directory プロセスに割り当てるメモリー量に変更します。

2. vde_start.sh を保存します。

ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化

次の手順では、HP/UX マシンで Oracle Virtual Directory を自動的に起動させるスクリプトを作成する方法を説明します。

1. root アクセス権でマシンにログオンします。
2. `cd /sbin/rc3.d` と入力して /sbin/rc3.d ディレクトリに移動します。
3. `ln -s /opt/OViD/vde.sh S22vde` と入力し、Oracle Virtual Directory をインストールしたディレクトリのルート（通常は /opt/OViD）にある vde.sh ファイルへのシンボリック・リンクを作成します。
4. `chmod 754 S22vde` と入力し、スクリプトの実行を許可するよう権限を変更します。
5. `ln -s /opt/OViD/vde.sh K22vde` と入力し、Oracle Virtual Directory をインストールしたディレクトリのルート（通常は /opt/OViD）にある vde.sh ファイルへの 2 つ目のシンボリック・リンクを /sbin/rc0.d から作成します。
6. `chmod 754 K22vde` と入力し、スクリプトの実行を許可するよう権限を変更します。

Oracle Virtual Directory の起動および停止

HP-UX プラットフォームでは、次のコマンドを使用して Oracle Virtual Directory の起動と停止を行います。

注意： Oracle Virtual Directory は通常、/opt/OViD/ にインストールされています。

1. Oracle Virtual Directory を起動するには、次のように入力します。
 - `/sbin/rc3.d/S22vde start`
または
 - `/opt/OViD/vde.sh start`
2. Oracle Virtual Directory を停止するには、次のように入力します。
 - `/sbin/rc0.d/K22vde stop`
または
 - `/opt/OViD/vde.sh stop`

Oracle Virtual Directory の削除

Oracle Virtual Directory を削除するには、次のようにします。

1. Oracle Virtual Directory が実行中でないことを確認します。実行中の場合は停止します。
2. root 権限を使用して、Oracle Virtual Directory インストールの Uninstaller ディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `./Uninstall` と入力します。

注意： ./Uninstall コマンドを実行しても、Oracle Virtual Directory がインストールされていたフォルダは削除されません。データ・ファイル、ログ・ファイルまたはカスタマイズされた構成ファイルが存在する場合、Oracle Virtual Directory を完全に削除するには、これらのファイルを手動で削除する必要があります。

AIX における Oracle Virtual Directory のインストール

この章では、AIX プラットフォームにおける Oracle Virtual Directory のインストールに必要な手順を説明します。インストール前提条件、システム・チューニングおよび Oracle Virtual Directory の削除方法を説明します。

オペレーティング・システム要件

Oracle Virtual Directory 10g (10.1.4.0.1) は、AIX 5.2 で動作保証されています。JRE 1.4.2 をサポートするためにインストールする必要のあるパッチ・セットに関する最新情報は、次の Web サイトを参照してください。

<http://www-106.ibm.com/developerworks/java/jdk/aix/?dwzone=java>

ディスク領域要件

ソフトウェアのインストール前に、使用可能なディスク領域が十分であることを確認してください。Oracle Virtual Directory のインストールには、ローカル・ストア・アダプタを使用するローカル・エントリのない状態で約 70MB のディスク領域が必要です。

ローカル・ストア・アダプタ (LSA) を使用しない場合、ディスク領域の使用はログ・ファイルおよび構成ファイルの保存のみに制限されます。ログ設定に応じて、使用量は最低限 (1 日当たり数 MB) の場合もあります。また、デバッグ・ロギング・モードを使用している場合は、かなり大量に使用されます。

LSA アダプタを使用する場合、LSA の運用に必要なディスク領域の量は、通常、アダプタにロードされるデータセット・サイズの約 150% です。たとえば、ユーザー当たりのエントリ数が 50 万で属性数が 10 の LDIF ファイルの場合、サイズは約 200MB になります。Oracle Virtual Directory では、インポートされたデータやその索引の保存に 300MB のディスク領域が必要です。

パッケージのインストール

AIX ベースのシステムに Oracle Virtual Directory をインストールするには、次のようにします。

GUI モード (X-Windows ベース)

1. 管理者権限のあるアカウントで AIX にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin` と入力します。
4. 「GUI を使用した Oracle Virtual Directory のインストール」の章で説明されている、GUI ベースのインストール手順に従います。

コンソール・ベース

1. 管理者権限のあるアカウントで AIX にログインします。
2. シェルを開き、Oracle Virtual Directory のインストーラが含まれるディレクトリに移動します。
3. プロンプトに `sh ./ovid1014.bin -i console` と入力します。
4. 「コンソールを使用した Oracle Virtual Directory のインストール」の章で説明されている、コンソール・ベースのインストール手順に従います。

ランタイムのメモリー割当ての変更

デフォルトでは、Oracle Virtual Directory は 512MB を使用するように設定されています。512MB という設定値は、Oracle Virtual Directory をディレクトリ・プロキシまたはデータベース・プロキシに使用したときにデータ管理に十分な余裕を確保できると実証された経験に基づいています。

Oracle Virtual Directory のオーバーヘッドを可能なかぎり低く抑える必要がある一部の ISV 環境のように、必要に応じて、より少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行することも可能です。ただし、少ないメモリーで Oracle Virtual Directory を実行すると、たとえばキャッシュ・プラグインが、128MB のメモリーで構成されている場合ほど有効に機能しないなどの制約が発生します。

キャッシュ・プラグイン内に持続期間の長いオブジェクトを維持したり、大規模データ・セットを対象に負荷の大きいデータ操作を行ったりする必要がある場合、Oracle Virtual Directory の消費メモリーは 1GB 以上になることもあります。ただし大部分のデプロイメントでは、デフォルトの 512MB で十分です。

ローカル・ストア・アダプタでメモリーを大量に使用している場合は、Oracle Virtual Directory の運用に割り当てるメモリー量の調整が必要な場合があります。次の表をガイドラインとして使用してください。

表 5-1 メモリー割当て要件の例

ローカル・エントリ数 / 属性数	必要なメモリー割当て
エントリ数が 5 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	45MB
エントリ数が 10 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	90MB
エントリ数が 25 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	225MB
エントリ数が 50 万で、エントリ当たりの属性数が 10 の場合	450MB

AIX プラットフォームのメモリー値は、メインのインストール・ディレクトリ（通常は /opt/OViD）にある vde_start.sh スクリプトを編集することで変更できます。メモリー値を調整するには次の手順に従います。

1. テキスト・エディタを使用して vde_start.sh を開き、ファイル末尾に移動します。最後の行は次のようになっています。

```
exec "$VDE_DIR"/jre/bin/java -server -Xmx512m
-Djava.net.preferIPv4Stack=true -Dvde.home="/opt/OViD"
-Dvde.lib="/opt/OViD/server/lib"
-Dvde.ldap.requireClientAuth="false" -Dvde.ldap.ciphers=""
com.octetstring.vde.VDEServer >
"$VDE_DIR"/log/vde_startup.log 2>&1
```

デフォルト値は -Xmx512m です（この場合メモリー割当ては 512MB です）。値を Oracle Virtual Directory プロセスに割り当てるメモリー量に変更します。

2. vde_start.sh を保存します。

ブート時における Oracle Virtual Directory の起動の自動化

次の手順では、AIX マシンで Oracle Virtual Directory を自動的に起動させるスクリプトを作成する方法を説明します。

1. root アクセス権でマシンにログオンします。
2. cd /etc と入力して /etc ディレクトリに移動します。
3. 次の行を入力してファイル inittab を更新します。

```
#Start Oracle Virtual Directory  
osvde:2:wait:/opt/OViD/vde.sh start > /dev/null 2>&1
```

注意： Oracle Virtual Directory は通常、/opt/OViD/ にインストールされています。

Oracle Virtual Directory の起動および停止

AIX プラットフォームでは、次のコマンドを使用して Oracle Virtual Directory の起動と停止を行います。

注意： Oracle Virtual Directory は通常、/opt/OViD/ にインストールされています。

1. Oracle Virtual Directory を起動するには、/opt/OViD/vde.sh start と入力します。
2. Oracle Virtual Directory を停止するには、/opt/OViD/vde.sh stop と入力します。

Oracle Virtual Directory の削除

Oracle Virtual Directory を削除するには、次のようにします。

1. Oracle Virtual Directory が実行中でないことを確認します。実行中の場合は停止します。
2. root 権限を使用して、Oracle Virtual Directory インストールの UninstallerData ディレクトリに移動します。
3. プロンプトに ./Uninstall_VDE と入力します。

注意： ./Uninstall コマンドを実行しても、Oracle Virtual Directory がインストールされていたフォルダは削除されません。データ・ファイル、ログ・ファイルまたはカスタマイズされた構成ファイルが存在する場合、Oracle Virtual Directory を完全に削除するには、これらのファイルを手動で削除する必要があります。

6

GUI を使用した Oracle Virtual Directory の インストール

この章では、GUI を使用したインストール・プロセスの基本的な手順、および AddAdapter と DbMapConfig ユーティリティの概要を説明します。

概要

Oracle Virtual Directory のインストーラは、グラフィック・モードおよびコンソール・ベース・モードの2つのモードで実行できます。コンソール・ベースのインストール・ツールは、GUI 環境を使用できないシステムにインストールできるように設計されています。コンソール・インストールの詳細は、「[コンソールを使用した Oracle Virtual Directory のインストール](#)」の章を参照してください。

Oracle Virtual Directory のインストールには2つのステップがあります。1つは基本インストールのステップで、Oracle Virtual Directory をホスト・サーバーにインストールし、基本的な操作パラメータを設定する主要なアクティビティが実行されます。このステップが完了すると、Oracle Virtual Directory がインストールされ、管理クライアントによる Oracle Virtual Directory の最終構成と管理が可能になります。

基本インストール

Oracle Virtual Directory のインストーラが起動されると、キットを解凍してインストールの準備を行ういくつかの事前ステップが実行されます。このステップが完了すると、最初のページが表示されます。

注意： インストール中はいつでも前後の手順に移動して、必要に応じてオプションを変更できます。インストールを中断する場合は、画面の左下にある「Cancel」ボタンをクリックします。

サーバー・インストーラにより、Oracle Virtual Directory のインストールが実行され、Oracle Virtual Directory Manager クライアントによるリモート管理の準備が行われます。既存の 2.0 構成の場合、構成はインストーラにより自動的に 10.1.4 XML ベースの構成ファイルにアップグレードされます。

GUI を使用して Oracle Virtual Directory をインストールするには、次の手順に従います。

1. インストーラを起動し、表示される手順に従います。「Server Administration」画面が表示されたら、サーバーの一意の名前と、Oracle Virtual Directory が管理サービスを提供する予定のポート番号を入力します。
2. システムに複数のネットワーク・インタフェース・カードがあり、それらのカードのいずれか1つのみで Oracle Virtual Directory 管理を使用できるようにする場合には、「Admin NIC」フィールドに NIC の IP アドレスを入力します。Oracle Virtual Directory の機密性とセキュリティを保護するには、Oracle Virtual Directory への接続時にはセキュア・モード (SSL) を使用することをお勧めします。セキュア・モードを選択すると、インストール後にインストーラにより、自己署名付き証明書を使用して Oracle Virtual Directory を構成するための追加の設定を要求されます。社内のセキュリティ要件に従い、認証局によって署名された証明書への変更が必要な場合があります。
3. root ユーザーは、サーバーに対するすべての管理機能を持つベース・ユーザーです。このアカウントは、リモート管理サービスへのアクセスおよび実行を許可されたデフォルト・アカウントでもあります。管理 URL を後から定義して、他のユーザーを管理者に指定できます。
4. Oracle Virtual Directory 10.1.4 には、3種類のクライアント・リスナーが用意されています。通常の LDAP サポートに加え、DSMLv2 によりディレクトリ情報へのアクセスに SOAP/HTTP ベースのサポートが提供されます。Oracle Virtual Directory には、Web ディレクトリ形式のアプリケーション用にカスタマイズ可能な XSLT ベースの Web ゲートウェイも用意されています。
5. 前の手順で選択したリスナーに応じて、各プロトコルのポートおよびネットワーク・インタフェース情報を要求されます。DSMLv2 および HTTP Web ゲートウェイは、同じ HTTP リスナーを共有しています。

6. インストーラにより、初期ディレクトリの接尾辞を要求されます。これは、サーバーに使用するルート DN である必要があります。この情報は、Oracle Virtual Directory のセキュリティを初期化して、このルートより下のデータへのアクセスをサポートするために使用されます。アダプタを構成する際には、仮想ディレクトリ・ツリーでこれと同じルートを使用してください。使用しない場合、アクセス制御にブロックされるためこれ以外のルートのデータは参照できません。これは、管理コンソールの ACL エディタから修正できます。
7. Windows にインストールする場合は、Oracle Virtual Directory を Windows サービスとしてインストールするかどうか (OS X の場合には自動起動ディレクトリとして定義するかどうか) を尋ねられます。サーバーを頻繁に使用する場合には、「Yes」を選択します。これにより、システム起動時に Oracle Virtual Directory が自動的に起動されます。
8. インストールのサマリー画面が表示されたら、「Next」をクリックしてインストールを続行します。この段階でサーバーがインストールされます。以前のバージョンをアップグレードする場合は、上書きされる情報について知らせる警告や通知もいくつか表示されます。アップグレード・プロセス中に、.prop 構成ファイルの新しい .os_xml 構成ファイルへの変換が試行されます。エラーが発生すると、問題を通知する診断画面が表示されます。この画面が表示された場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。
9. 管理ゲートウェイに安全な通信を使用することを選択した場合は、インストーラによる一時的な自己署名付きサーバー証明書を作成を可能にし、Oracle Virtual Directory Manager クライアントと Oracle Virtual Directory 間の管理に関する通信を保護するための設定を要求されます。
 - サーバー名には、クライアントがサーバーへの接続に使用する IP アドレスまたは DNS 名 (ldap.vde.myorg.com や 192.168.0.1 など) を入力します。
 - サーバー名の情報を入力したら、国、都道府県名および組織など、残りの証明書情報を入力します。「State」は必須フィールドで、正式名称で入力する必要があります。「Country」も必須で、2 文字形式 (アメリカの場合は US など) で入力する必要があります。
 - 残りの証明書情報を入力したら、情報を正しく入力したことを確認できるサマリーが表示されます。この時点で「Next」をクリックすると、インストーラにより自動的にサーバー・キーが生成され、成功か失敗かが確認されます。失敗した場合は、証明書の値を確認して再試行します。問題が解決されない場合は、Oracle Virtual Directory のインストール先の log ディレクトリにあるログを確認します。詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。
10. サーバーのインストールと SSL サーバー証明書のオプションの構成が正常に完了すると、「Install Complete」画面が表示されます。「Oracle Virtual Directory Manager クライアントのインストール」の章に進み、Oracle Virtual Directory Manager クライアントのインストールを完了します。Oracle Virtual Directory の構成方法の詳細は、『Oracle Virtual Directory 製品マニュアル』を参照してください。

コンソールを使用した Oracle Virtual Directory のインストール

この章では、Oracle Virtual Directory のコンソール・モード・インストールを説明します。コンソール・モード・インストールは、Windows プラットフォームでは使用できません。ただし、自動（サイレント）インストーラのパッケージの詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターの担当者にご連絡ください。

コンソール・インストーラにより、基本の Oracle Virtual Directory がインストールされます。その後、管理者が構成ファイルを編集し、アダプタ (adapters.prop) を追加してより詳細なオプションを設定します。

インストールの開始

インストール・キットが含まれるディレクトリで、`sh ./ovid1014.bin -i console` コマンドを実行し、コンソール・インストーラをアクティブ化します。

システムにより、次の内容が表示されます。

```
Preparing to install...
Extracting the JRE from the installer archive...
Unpacking the JRE...
Extracting the installation resources from the installer archive...
Configuring the installer for this system's environment...
```

```
Launching installer...
Preparing CONSOLE Mode Installation...
```

```
=====
                          (created with InstallAnywhere by Zero G)
-----
```

次に、概要が表示されます。

```
=====
Introduction to VDE
-----
```

```
Welcome to Oracle Virtual Directory. The Oracle Virtual Directory
is a multi-function LDAPv3 server that provides combined directory server, LDAP
proxy, database proxy, and data joiner that forms today's most comprehensive
directory service product.
```

InstallAnywhere will guide you through the installation of VDE.

This console installation will perform a "Minimal" installation to get basic VDE installed and running. If a GUI environment is available, Oracle recommends using the GUI mode installer for more installer options.

NOTE: If you wish to go back a step enter BACK or Back at any prompt. If you wish to abort the install enter QUIT.

PRESS <ENTER> TO CONTINUE:

インストール・ディレクトリの選択

次に、インストール・フォルダの選択を要求されます。フォルダが存在しない場合は、インストーラにより作成されます。入力が必要なインストール手順では、QUIT と入力してインストールを中断することも、BACK と入力して前の手順に戻ることも可能です。

```
=====
Choose Install Folder
-----
```

Note: It is preferable not to have spaces in your directory names.

```
Where would you like to install?
Default Install Folder: /root/Oracle/OViD
```

ENTER AN ABSOLUTE PATH, OR PRESS <ENTER> TO ACCEPT THE DEFAULT

初期構成

インストーラにより、Oracle Virtual Directory Manager 管理クライアントによる管理を可能にするために、サーバーの最低限の構成に必要な情報の指定を要求されます。

```
=====
Initial Configuration Steps
-----
The install script will now take you through some initial configuration steps.
After the initial installation, you may configure the directory adapters (data
sources) using the Oracle Virtual Directory Manager administrative client.

PRESS <ENTER> TO CONTINUE:
```

管理ゲートウェイの構成

管理ゲートウェイは、Oracle Virtual Directory への管理アクセスを可能にします。

```
=====
VDE Administrative Gateway Configuration
-----
Enter a uniquely descriptive name for the server.

Server Name (DEFAULT: Oracle Virtual Directory): Chicago 1 VDE

入力する名前は、管理しやすい一意の名前であることが必要です。ただし、それは必須ではなく、サーバー・ホスト名 (DNS 名) と同じにすることも可能です。

次に示す質問は実際のゲートウェイに関連します。ネットワーク・インタフェース・カードのアドレスに関しては、サーバーに複数のネットワーク・カードがあり、Oracle Virtual Directory で (すべてのインタフェースではなく) 1つのネットワーク・インタフェースの管理リクエストのみをリスニングする場合以外、フィールドは空白のままにします。

=====
Network Interface
-----
Enter the NIC IP if the server is to offer administrative service on only one network
card (when multiple network cards are present).

Leave blank (default) to listen on all network interfaces.
Network Interface Card Address (DEFAULT: ):

=====
Administrative Gateway Port
-----
Enter the port number on which to provide administrative services.

Port Number (DEFAULT: 8888):

=====
Enable SSL
-----
Enable SSL/TLS on the administrative gateway for VDE?

->1- Enabled
   2- Disabled
ENTER THE NUMBER FOR YOUR CHOICE, OR PRESS <ENTER> TO ACCEPT THE DEFAULT:
```

管理ゲートウェイでは SSL/TLS を有効にすることをお勧めします。有効にすると、管理構成情報が保護され、暗号化されて通信されます。SSL の有効化を選択すると、インストールの最後に、一時的な自己署名付きサーバー証明書を使用して Oracle Virtual Directory を構成するための追加の設定を要求されます。社内のセキュリティ要件によっては、この証明書を指定された認証局によって署名された証明書に置き換える必要がある場合があります。

root ユーザー・アカウント

root ユーザー・アカウントは、Oracle Virtual Directory の管理に使用される主要なアカウントです。このアカウントは Oracle Virtual Directory 内に構成され、その他のシステムには存在しません。

```

=====
Root User Account
-----
VDE uses an internal account called the root user account for administration and
management. Enter the distinguished name desired for the root user.

Root User DN (DEFAULT: cn=Admin):
=====
Root User Password
-----

Enter a password for the root user account. Note: the value will be echoed in clear text
to your screen.

You should change the password using administrative client after the installation is
complete.

Password: (DEFAULT: changeit): manager

```

コンソール・インストール中に、パスワードがそのまま表示されます。パスワードは、Oracle Virtual Directory Manager クライアントを使用して後から変更できます。

リスナー構成

インストーラにより LDAP リスナーが構成されます。削除やその他のリスナーの追加も含め、構成は、Oracle Virtual Directory Manager を使用して後から変更できます。

```

=====
Listener Configuration
-----

During this minimal installation, the installer will automatically configure a
single LDAP listener. You will now be asked for configuration options for the
LDAP listener.

After the installation is complete, you may re-configure this listener and add
other listeners (such as DSMLv2) using the DME administrative client.

PRESS <ENTER> TO CONTINUE:

=====
LDAP Listener Network Interface
-----

Enter the Network Interface IP Address for VDE to provide services on. Or, leave blank
to listen on all available network interfaces.

NIC Host Address (DEFAULT: ):

=====
LDAP Port
-----
Enter a port number to provide LDAP services on (e.g. 389, 636).

Port (DEFAULT: 389):
=====
LDAP SSL Mode

```

Enable SSL/TLS?

- 1- Enabled
- >2- Disabled

ENTER THE NUMBER FOR YOUR CHOICE, OR PRESS <ENTER> TO ACCEPT THE DEFAULT:

ディレクトリ・ベースの接尾辞

インストーラにより、ディレクトリ・ベースの接尾辞を要求されます。このベースは、ディレクトリのメイン・ルートになります。このベースは、ディレクトリ全体に対するデフォルトのアクセス制御の設定に使用されます。

```
=====
Directory Base
-----
```

Define the base entry of your directory (e.g. o=mycorp,c=us). This will be used to configure an initial set of access control lists and will be used to allow you to configure VDE adapters if selected.

Please enter the base entry of your directory (e.g. o=YourCompany,c=US)

Directory Base Suffix[dc=YourCompany,dc=com]:

インストール準備の完了

この時点で、インストーラによるサーバーのインストールはほぼ完了です。最終確認として、インストーラによりターゲット・インストール・ディレクトリが表示されます。次に、このインストールに設定されるデフォルト構成が表示されます（これは、GUI インストーラの最小モード・インストールと同等です）。インストールが完了すると、conf ディレクトリのプロパティ・ファイルを編集できます。構成可能なプロパティおよびオプションの詳細は、『Oracle Virtual Directory 製品マニュアル』を参照してください。

インストール・プロセス中、画面にテキストのプログレス・バーが表示されます。

```
=====
Installing...
-----
```

```
[=====|=====|=====|=====]
[-----]
```

インストールが完了すると、インストーラにより Oracle Virtual Directory ソフトウェアが正常にインストールされたことが通知されます。

インストール後の手順 - SSL 構成

インストールの終了後、自己署名付きサーバー証明書を使用して Oracle Virtual Directory を構成するための設定を要求されます。管理ゲートウェイに SSL モードを設定しなかった場合、この手順はスキップされます。

いくつかのフィールドはオプションで、特定の書式要件（国は2文字で入力するなど）があるフィールドもあります。サーバー・ホスト名では、管理者がホスト接続情報でサーバーの特定に使用する IP アドレスまたは DNS 名を使用してください。

```
=====
Initial SSL Configuration
-----

In order to configure your server for secure administrative communication, the
installer will initially configure the server with a self-generated (self-signed)
certificate.

If you wish to install a certificate to be signed by another certificate authority, you
may do so using the DME management tool after installation is complete.

PRESS <ENTER> TO CONTINUE:

=====
Server Host Name
-----

Enter the server IP address or DNS name that you will use to connect to the
administration port of this server. Note that you must use this name to connect to this
server. For example, if you enter a DNS name (myVDE.myorg.com), you must use the same
address (myVDE.myorg.com) in the server connection dialog within the management client.

Server Name: (DEFAULT: ): 192.168.0.20
=====
Organizational Unit
-----

Enter your organizational unit (optional)

OU= (DEFAULT: ):

=====
Organization
-----

Organization Legal Name (e.g. as defined by Dun & Bradstreet)

O= (DEFAULT: ): MyCompany.

=====
Locality
-----

Locality (e.g. City, Principality) (optional)

L= (DEFAULT: ): Chicago

=====
State
-----

State (spelled out. e.g. Lower Saxony)
ST= (DEFAULT: ): Illinois
```

```

=====
Country
-----

Country (two letter format only, e.g. US, UK)
C= (DEFAULT: ): US
=====
Self-signed Certificate Summary
-----
The following information will be used to generate your self-signed server
certificate:
Key File: conf/keys.db
Server Alias: serverSelfSigned
Subject Name: CN=192.168.0.20,O=MyCompany (Self-Signed Server Key - No
warranty or assurances),L=Chicago,S=Illinois,C=US
Key Expires: 730 days (2 years)
Key Alg: RSA
Key Size: 1024
PRESS <ENTER> TO CONTINUE:

SSL のキー生成が成功すると、次のメッセージが表示されます。

=====
SUCCESS
-----

Server certificate successfully generated!

PRESS <ENTER> TO ACCEPT THE FOLLOWING (OK):

```

インストールの完了

インストールが完了すると、次に示すような確認画面が表示されます。

```

=====
Installation Complete
-----

Congratulations.VDE has been successfully installed to:

/root/Oracle/OViD

You must complete the following steps:

1. Start the newly installed/upgraded server.This will enable remote management access.
2. Install the management client (DME) on this machine or another client
system.
3. Use DME to connect to this server and complete the configuration and
management.

PRESS <ENTER> TO EXIT THE INSTALLER: THE INSTALLER:

「Oracle Virtual Directory Manager クライアントのインストール」の章に進みます。Oracle
Virtual Directory Manager を使用して、Oracle Virtual Directory を構成および管理します。

```

Oracle Virtual Directory Manager クライアント のインストール

Oracle Virtual Directory Manager クライアントを使用すると、管理者や開発者は1つ以上のディレクトリを操作および管理できます。通常、管理クライアントは管理者のデスクトップまたはワークステーションにインストールされます。そのため、Oracle Virtual Directory Manager は別のインストールとして配置されます。

Oracle Virtual Directory Manager は、Eclipse オープン・ソース・プラットフォーム (<http://www.eclipse.org>) に基づいたスタンドアロン・パッケージです。Eclipse プラットフォームには拡張アーキテクチャが用意されており、Oracle Virtual Directory Manager のような製品をスタンドアロン製品として実行することや、IBM WebSphere Studio Application Developer などのその他の管理システムのプラグガブル・コンポーネントとして実行することが可能です。このインストレーション・ガイドでは、Oracle Virtual Directory Manager のスタンドアロン製品としてのインストールのみを説明します。Oracle Virtual Directory Manager の詳細は、『Oracle Virtual Directory 製品マニュアル』を参照してください。

オペレーティング・システム要件

- Windows 2000、2000 Professional、Windows XP、XP Professional、Windows 2003 (約 140MB のディスク領域が必要)
- GTK GUI 環境 (Motif はサポート対象外) のある Red Hat または SuSE Linux (約 90MB のディスク領域が必要)

サポート対象のその他のプラットフォームの詳細は、<http://www.eclipse.org> を参照してください。

Oracle Virtual Directory Manager のインストール

Oracle Virtual Directory Manager のインストーラ・プログラムにより、Oracle Virtual Directory Manager がインストールされると、使用するディレクトリの管理プロセスを開始できます。これは新しい製品であるため、アップグレード・プロセスは提供されておらず、必要ありません。Oracle Virtual Directory Manager は、Oracle Virtual Directory と同じシステムにも異なるシステムにもインストールできます。

1. インストーラを起動し、表示される手順に従います。Windows でのインストールの場合は `ovidm1014.exe`、UNIX および Linux でのインストールの場合は `ovidm1014.bin` を起動します。
2. インストール・ディレクトリを選択する際には、Oracle Virtual Directory とは別のディレクトリを選択します。
3. Oracle Virtual Directory と同様に、必要な場合はショートカット・フォルダを選択します。
4. ワークスペースを選択します。ワークスペースは、Oracle Virtual Directory Manager 内で管理している様々なプロジェクトの管理や状態の情報とともに、サーバー構成データのローカル・コピーの保存に使用されます。デフォルトでは、ワークスペースは Oracle Virtual Directory Manager のインストール・ディレクトリに内に設定されています。ワークスペースを、ファイル・システムの別の場所に配置することもできます。
5. インストールのサマリーが表示されます。インストーラにより、サマリーと必要なディスク領域の見積りが表示されます。「Next」をクリックしてインストールを続行します。
6. インストールの完了後、Oracle Virtual Directory Manager の概要を参照するには、『Oracle Virtual Directory 製品マニュアル』の Oracle Virtual Directory Manager の章に進みます。